

江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当・土屋 薫

はじめに

本稿は国立公園研究所年報No.1に掲載されている拙稿「国民は国立公園で何をするのか」に続く論考として書かれたものである。国立公園を「味わい楽しむ」ために何が必要なのか、「自然レクリエーション」としての魅力と出会うために有効な仕組みづくりに向けて求められるものの整理を試みた。さらに言えば、網羅型・プッシュ型の情報提供の仕組みづくりに向けた内在的原理を明らかにしようとするものである。

レジャーと国立公園

筆者の専門領域であるレジャー・レクリエーション研究の立場から言うと、レジャーとは、通常

使われるような単なる遊びや行楽の意味ではなく、リベラル・アーツに関わる中で手に入れた自由な心の状態を指す。このリベラル・アーツは、教養と訳されるように、特定の目的に縛られない学びの場のことを意味する。つまり、打算的な目的ではなく、ただ面白いがゆえに関わってしまう、というのがレジャーの姿なのである。そして、その面白さに夢中になっていると、嫌なこと（ストレス）は自動的に忘れてしまっている。夢中になる仕組みについては、「フロー」とか「ゾーン」と呼ばれたりするが、技術とチャレンジ精神のバランスが取れた時にはじめて成り立つと言われている。高い技術をもった人間がチャレンジする時、人は没我の状態になると言うのである。

ただこのように整理した時に、

次の問いが発生することになる。「国立公園で夢中になれるものがあるか？ ありとしたりそれは何か？」

はたまた国立公園に関わる技術とは何で、国立公園におけるチャレンジとは何を意味するのか？それが解明されると、国立公園におけるレジャーが成立することになる。国立公園に行くこと嫌なことが忘れられる。何と素敵な響きのだろう。だが実際には、そうしたことは起きたとしてもなかなか長続きしない。何故かと言うと、例えば眺望だけで考えてみても分かる通り、人は「馴れてしまふ」動物だからである。どんなに素晴らしい景色でも見た瞬間の感動は、三〇秒もすると「当たり前」になっていく。視覚だけでは限界があるのだ。

それでは、国立公園を非日常空間としてとらえると、どうなるだろう。

通常われわれの生活は、日々繰り返される日常とそれに連なる非日常との連鎖によって構成されている。一日の中に労働時間や休憩時間があり、一週間の中に平日と休日がある。それは空間や時間の

中でつながっており、ある種の繰り返されるパターンとして認識されている。だが、国立公園に訪れるという場合、日常空間とはかけ離れた場所へ、日常の生活時間とは断絶された移動時間をかけて、日常的には用いない移動手段と経路で出かけていくのである。

国立公園という非日常は、「日常生活に連なる非日常」とはまったく別の意味合いをもつ。すなわち、「日常生活に連なる非日常」が日常における「嫌なこと」（ストレス）を忘れるためのものであるとするならば、国立公園で過ごす非日常は、「日々繰り返される日常とそれに連なる非日常」全体をも見直すための機会となる、ということである。

目指すべき
情報提供のかたち

昨今、SNSを通じた情報発信やインバウンドを意識した多言語化の重要性が説かれているが、情報の精緻化の行き着く先には何が待っているのだろうか。網羅された情報の海と必要な情報へたどり着くための項目内検索やハイパーテキストの乱立と化したページと

なってしまうのか。

情報提供の仕組みという観点からは、関連項目の充実や利用者に関するビッグデータの存在・活用あるいはテキストデータだけでなく画像・動画も自明のものとして考えた時、また通信環境に関わるインフラも整備されているものとして、情報量だけを売り物にしない情報提供の仕組みにどんなものが考えられるのだろうか。

われわれ人間が「象徴」を扱う存在として、ひとつの事象に多様な意味や価値を読み取れるようになって以来、ものごとを認識する時に常に意識しているのは「文脈」であろう。

もはや無意識のうちに「準拠枠」を設けて（先人観に基づいて）物事を見ていると言っても過言ではない。

このことを国立公園の景観を目の前において考えてみよう。答えは「そこ」（眼前）にあるのである。

アナロジーの考え方を参考にするならば、答えとして扱うべき材料は決まっています。それを答えとする問いをどのように設定するか、ということになる。眼前の景観は

奇跡的な政治闘争の果ての賜物なのか、貴重な生態系の生き証人なのか、はたまた異文化間交流の証なのか、次世代への警鐘と誓いなのか。答えはひとつ、眼前の景観だけなのだが、それがどのような問いの答えなのか、その人の関心事によって、もつ意味が異なってくる。

その景観の前に立つ人物にとって、最も価値のある問いの答えとして位置付けられた時、その場所はその人にとって最も輝く場所となるであろう。そうした気付きが起きる情報のセットを選択的・優先的にプッシュしていくことこそ、その国立公園に対するリテラシーを涵養することにつながるのではないだろうか。

まとめ

このように、単に公園として空間を管理するのではなく、リテラシーを涵養していくことによって、その国立公園は、来訪者にとって「オンラインワン」の価値をもつものとなる。そしてそのとき、国立公園は理想郷というリソースとして位置付けられるのではないだろうか。

トマス・モアが描き出した理想

郷は「ユートピア」と名付けられているが、この理想郷とは労働形態から人口までライフスタイルのあらゆる場面で管理された共同体である。国立公園の中にわれわれが見出す理想郷とは、そうした管理された「都市理想郷」ではなく、むしろ、桃源郷やシャングリラ、オリンピックやエデンの園といった名前前で呼ばれる自然の価値に根ざした「田園理想郷」として位置付けられるだろう。

国立公園の二大使命とされる保護と利用は、生物多様性をベースとした持続的利用のための環境保全や施設整備といった管理的な方向に加えて、インバウンド対応や高付加価値を含めて、来訪者と世



十和田八幡平国立公園 蕨沼

界をつなぎ、かつ来訪者の世界を豊かにする方向も視野に入れて構想されることを願っている。

参考文献

- Richard Kraus "Recreation and Leisure in modern society". Englewood Cliffs, NJ:Prentice-Hall
- トマス・モア(訳=平井正徳)(一九五七):『ユートピア』(岩波書店)
- 多摩大学総合研究所・大和ハウス工業生活研究所(一九九三):『レジャー産業を考える』実教出版
- 土屋薫(二〇一八):『レジャーと観光を結び糸』江戸川大学現代社会学科編『気づき』の現代社会学Ⅲ 梓出版社

土屋 薫●つちや かおる

日本レジャー・レクリエーション学会理事、青森大学社会学科、江戸川大学ライフデザイン学科准教授を経て二〇一四年より江戸川大学現代社会学科教授。専門はレジャー社会学、レジャー教育。二〇一六年より江戸川大学地域連携推進センター長。



慶良間諸島国立公園 北浜